<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>中村元の『インド思想史』 一つの読み方</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>湯田 豊</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>人文研究  神奈川大学人文学会誌 141: 1-38</td>
</tr>
<tr>
<td>日時</td>
<td>2000-12-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>部門別論文</td>
</tr>
<tr>
<td>資料元</td>
<td>神奈川大学</td>
</tr>
<tr>
<td>リターン</td>
<td>公有領域</td>
</tr>
</tbody>
</table>
中村元の「インド思想史」

序

論

（九五六年）を始めとし、多くの著作を出版し、彼の著作は「中村元選集」（決定版）に全四巻を一九五六年に内行し、一九七七年に「近代思想」上下

世界思想史(6)(7)「中村元選集」（三三三）を世に問うた。中村博士の研究領域は比較思想を含め、非常に

湯

田

豊

中村元（一九二一～一九九九）は、一九四三年に東京帝国大学助教授になり、一九七三年に東京大学を定年によ

って退職するまで、印度哲学科において教授としてインド哲学を講義し、停年退職後死去するまで日本のインド哲

學界に最高の権威として君臨した。中村元博士は、東洋人思惟方法、日本思想、特別に東洋人哲学を論じた『インド思想史』（九五六年）を始めとし、多くの著作を出版し、彼の著作は『中村元選集』（決定版）に全四巻を一九五六年に内行し、一九七七年に『近代思想』上下

世界思想史(6)(7)『中村元選集』（三三三）を世に問うた。中村博士の研究領域は比較思想を含め、非常に

湯

田

豊

中村元（一九二一～一九九九）は、一九四三年に東京帝国大学助教授になり、一九七三年に東京大学を定年によ

って退職するまで、印度哲学科において教授としてインド哲学を講義し、停年退職後死去するまで日本のインド哲

學界に最高の権威として君臨した。中村元博士は、東洋人思惟方法、日本思想、特別に東洋人哲学を論じた『インド思想史』（九五六年）を始めとし、多くの著作を出版し、彼の著作は『中村元選集』（決定版）に全四巻を一九五六年に内行し、一九七七年に『近代思想』上下

世界思想史(6)(7)『中村元選集』（三三三）を世に問うた。中村博士の研究領域は比較思想を含め、非常に

湯

田

豊
広範囲であって、そのテーマは多岐にわたっている。しかし、中村博士は本格的に仏教を学び、
仏教ないしインド哲学についての研究が最も注目されるべきである。

中村博士の『インド思想史』は、出版されてから長い間、多くの人々によって読まれ、一九七八年に第12刷が発
行された。わたたくし自身、二十代の前半に、中村博士の『インド思想史』を読み、その恩恵に浴している。本書は
岩波全書に収められていることもあり、インド哲学を初めて学ぶ人々に今後も読まれ続けられることがであろう。わた
たくしは本書を読んだのは、今から四十数年も前のことである。この本が出されてから、世界のインド哲学の研究
は大きく進歩した。しかしながら、我国におけるインド哲学の研究は、中村博士の『インド思想史』に収められてい
る彼の研究の域を出ていないと言えなくもないであろう。この機会に、わたたくしは一人の読者として、彼の『イン
ド思想史』について論じるには、わたたくしに与えられた紙数は、あまりにも少ないのであって、わたたくしとしては問題の
史を読むことを断念し、インド思想に関する中村博士の見解を簡明に検討することにした。中村元の『インド思想
史』は、どのように評価されるべきであろうか？

中村元の『インド思想史』（第12刷）を読む際には、わたたくし自身のパースペクティブにおいて中村元の『インド思想
史』について論じるには、わたたくしに与えられた紙数は、あまりにも少ないのであって、わたたくしとしては問題の
思い出。わたたくしのインド思想へのアプローチの仕方は、もちろん、中村博士のそれとは異なる。彼の『インド思想
史』について論じるには、わたたくしに与えられた紙数は、あまりにも少ないのであって、わたたくしとしては問題の
博士は次のように言っている——「ただこの小冊子にインド思想全体をまとめて述べることは極めて困難である

中村元の『インド思想史』の中の最も重要な箇所だけに論述を限定せざるを得なかった。さて、『はしがき』において、中村
中村の『インド思想史』について論じるには、わたたくしに与えられた紙数は、あまりにも少ないのであって、わた


H. von Glanagap: Die Philosophie der Indier, 1949

P. Masson-Querel: Exquisse d'une histoire de la Philosophie Indienne, 1923

O. Stuhl: Indische Philosophie, 1926

J. Shinuma: A History of Indian Philosophy, 2 vols, 1962, 1966

S. Dasgupta: A History of Indian Philosophy, 5 vols, 1922

P. Deussen: Allgemeine Geschichtliche der Philosophie I, 1-3, 1894
ウパニシャッドに至るインド思想の流れを「インド思想史」の著者がどのように解釈しているかということを明らかにせねばならない。ヴェーダの思想のクライマックスは到達されたのであろうか？そしてウパニシャッドの哲学とは何か？この問いに「インド思想史」の著者は、どのように答えるであろうか？

II. 初期仏教の教えという項目の下に考察されるのは、もちろん、初期仏教の思想、あるいは仏の教えである。仏教の創始者仏教を別にすれば、仏教を始めとする六人の自由思想家が存在する。このような社会的な背景において、仏の教えがどのように形成されたかということの検討——それがII. 初期仏教の教えにおける一つの大きな流れに属する。マーラーの哲学も、インド思想史において一つの大きな流れに結びつく。マーラーの教えをどのように理解していたのであろうか？それが問題である。

III. 仏教の教えにおいては、考え方のギーターのギーターのテマをどのように理解していたのであろうか？それが問題である。仏教の教えにおいては、考えられているのは、六つの正統バラモンの精神を指すものである。マーラーは、こうした概念をどのように理解していたのであろうか？
哲学体系であり、「インド思想史」の著者の言葉を借りて言えば、「古典サンッカ説の体系、ニーヨーガ学派、
ミーマーナ学派、四、ヴァイシュニカ学派、五、ニーヤーナ学派と論理学。六、ヴァーダーナ学派であ
る。中村博士は、正統バラモン系の中心、「六派哲学」以外に、ことばの形而上の「ベルトリアリ」と叙事詩の
完結とプラーナ聖典を含める。「六派哲学」に対立するが、大乗仏教哲学者の二大体系、すなわち、中観説および
唯識説である。しかるに、中村博士は「インド思想史」において中観説、および、それ以外の大乗仏教の哲学体系
『如来藏思想、デイグナーの仏教論理学、密教』についても論じている。

V. 現代のインド思想という視点において、インド思想史に登場するのが、ヴァイェーカーナンダ、チャータニヤ
などによって生成化された。これらの思想家たちに次いでインド思想史の伝統を担うのが、ヒンドゥー教の思想である。中世のヒンドゥー
教はシヴァ派およびヴィシュヌ派の遺産を相続し、ジャヤラ・ラーマヌージャ、マドヴァなど多くの思想家を生
み出した。そして近代のインドにおいて、ヒンドゥー教の思想家はガーンディー（一八六九～一九四八）である。ガーンディーはガーンディーの
思想家であるガーンディー（一八六九～一九四八）である「インド思想史」において中村元によって項目を公立論じ
られているのは、ガーンディー、クゴー、およびネルだけである。中村元の「インド思想史」は、インドの文化現象である思想を年代に沿って、いわば「即物的に」[Selbstlichen]に説明しようという試みを代表する。中村博士は、サンスクリットあるいはパーイ語などの言語の豊富な知識を織
横に駆使して、古代インドから現代に至るインドの哲学思想を公平に紹介しようとしたのである。しかしながら、
彼の『インド思想史』はインドの哲学思想そのものの流れをただひたすら追い求めるという性質のものではない。

インド思想史の流れをストレートに理解することを妨げられる。中村博士は事物をその深みにおいて把握しているようには思われない。われわれの知識は、彼があるところも中村博士は事物をその深みにおいて把握しているようには思われない。われわれの知識は、彼が持っていることばかりで、それは不十分である。『インド思想史』の作者はインド思想史の流れを生き生きと心に思い浮かべる能力を身につけているべきではない。われわれの知識は、われわれ自身の視点によって制約され、相対的なものに過ぎない。自己の知識を、われわれは一つの仮説として読者に示すべきである。

1. ウパニシャッドの哲学思想

『インド思想史』の著者は、ヴェーダの哲学思想をリーガ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダおよびブラーフマナの中に見出す。そして、ヴェーダ時代の終わりに、『ウパニシャッドの哲学』が登場する。このように中村博士
考えている。ルイ・ヴェーダの中に哲学思想の萌芽を見出し、中村博士はルイ・ヴェーダの代表的な哲学詩を幾つか引用し、「何にか否か」としては「元論的傾向が強い」ということは、存在の方法は適切であろうか？一元論的傾向が強いということは、存在の理論として考えている。しかし、このような叙述

あるべき世界が生じるという哲学詩において、「存在は存在で」Legendary・ヴェーダ・X・129・17においては、創造論歌の冒頭において、次のように歌われている——

創造論歌の冒頭において、次のように歌われている——

創造論歌の冒頭において、次のように歌われている——

創造論歌の冒頭において、次のように歌われている——
日本のインド探検

中村元の「インド探検」
中村元の『インド思想史』

五彩二道説によれば、シャーンディリヤはブラフマン・アートマン同一説を説いている。中村博士によれば、シャーンディリヤはブラフマン・アートマン同一説を改変するブラフマン説を提案し、アートマンをブラフマンと同一視している。中村博士によれば、シャーンディリヤはブラフマン・アートマン同一説を説いている。中村博士によれば、シャーンディリヤはブラフマン・アートマン同一説を改変するブラフマン説を提案し、アートマンをブラフマンと同一視している。中村博士によれば、シャーンディリヤはブラフマン・アートマン同一説を改変するブラフマン説を提案し、アートマンをブラフマンと同一視している。
中村元の「インド思想史」
日本語の文書です。
自己を肯定する六つの哲学者的見解を否定している。人間を構成する五つのグループ—身体、感情、意識、情動、おも認識—を、ブッダは「これは、わたたくしのものではない、わたたくしのものではない」と言っている。ことごとく、彼は違う。おも認識である。これを、「これは、わたたくしのものではない、わたたくしのものではない」と言っている。

比丘たちよ、もし、自己および自己に属する何かあるものが実際に、真実に見出されなければ、「これ」は、世界である。これは自己である。死後に、わたたくしは恒常的になり、永遠的になり、永遠なり。変わらぬ、い法則に従うようになるであろう、そして、わたたくしは永遠にそのような状態にとどまるであろう。こうか、この見解の信条、これは、比丘たちよ、全く完全に真実の教えではないか。

ブッダは「インドにウパニシュッドのアートマン説」「愚者の教え」として嘲笑している。しかし、わたたくし自身の考え方、形而上学的な自己、または、行為の主体としてのアートマンを否定しなかったというのが中村元の論理である。わたたくし自身の考えによれば、ブッダは行為の主体のない認識の主体、すなわち、「行為しつつある自己」および「認識しつつある自己」を否定したのである。
的な自己あるいは真実の自己が存在するためには個人的な主体が認知されるべきである。ジャナカ王に対して、ヤーターは真実の自己が存在しないからである。なぜなら、見ているものに見える能力の喪失は存在しないからである。それは不滅であるから、見つける自己が他ならない。そして、見つける自己は不滅である。それは、見ているものに見える主体である。トゥダッマにたよりにおいて、「自己」は、再帰的名詞として理解されるべきである。ブッダのすべての説法、「自己（アートマン）」に否定された。わたくしは、このように考える。自己の自己は初期仏教においては、アッタは単なる名称に過ぎない。初期仏教においては、アッタは単なる名称に過ぎない。ジャナカ王に対する哲学家派として重視されているのは、説一切有部（サルヴァストィーサ）および経量部（Sautrantika）であろう。中村博士の「インド思想史」には、これら三つの哲学家派についての説明が見出される。
冷酷な事実を直視し、何故かか的苦が現れれているのか、その所以を探求して、結局人生の真実に関する無知（※無明）がわれわれの生存の根柢に存し、それが根本条件となっているから、その無明を消することによってわれわれの苦を消滅するという趣意を明らかにしようとしている「インド思想史」62～63頁。このように、中村博士は言っている。四つの貴な真理と並んで初期仏教を代表するのは「縁起」である。十二縁起は後に仏教判国のメンバーによって編み出されたとしても、縁起の思想そのもののは、恐らく、仏教によって考え出されたものであろう。「インド思想史」において中村博士は縁起について、ほとんど説明していない。それは、それでない。問題のは、縁起、という思想が相互依存、相互関係のネットワークを代表するためには、変化しない、永遠の自己が否定されている初めて、この世における生成のプロセスは成立する。縁起を発明したブッダ、彼が変化しない永遠の自己を認めただけということが有り得るか？

III：ギターのテーマ

インドの大叙事詩「マハーバーラタ」および「ラーマーヤナ」は、西暦紀元前四〇〇～西暦紀元一〇〇〇年の間に成立したように思われる。マハーバーラタは一戦争譚を主軸としてその他の多数の神話・伝説・物語を含み、当時の法律・政治・経済・社会制度を鏡照せしむべき無尽蔵の資料を有し、さらに当時の民间信仰・通俗哲学をも伝え
中村元の「インド哲学」
行為すべきである」ということである。この命令は、ギターにおいてカルマ・ヨーガ、行為の道と名づけられ

ジャンガナの「自己の義務」（ṣraddhānaṣa）および「カルマ・ヨーガ」を実行することによって、アルジュナの命令である。

アルジュナに対するクリシュナの第三の命令は、「わたしを愛する人は、わたしにとって愛しい」。わたしを献身的

に対する「神の愛」（brahmin）を要求する。しかし、彼あるいは人間がクリシュナを愛さなければ、クリシュナはアルジュナ愛さなければ、クリシュナは愛さない。クリシュナを愛さなければならない。クリシュナを愛さなければ、「愛の道」（brahmin）を、クリシュナがアルジュナ愛さなければ、クリシュナもその見返りとして

すべての生きものに対して、わたしは平等である。わたしには憎むべきもいない。愛しいものもいない」と言う。

あること？「わたしには憎むべきものいない。愛しいものもいない」と言わざる。それにかかわらず、クリ

シナは「わたしを愛する人は、わたしにとって愛しい」「愛を有する人は、わたしにとって愛しい」

二〇参照」と、繰り返し、繰り返し強調する。
[> ] ふたつの切れ目の線を引いて、兵士をつかった二つの切れ目の線を引きます。兵士たちが合体して戦います。

— ふたつの切れ目の線を引いて、兵士をつかった二つの切れ目の線を引きます。兵士たちが合体して戦います。
神を愛する人は悪から解放されて救われる。しかし、故意に神に背く人々に対してクリシュナは極めて冷酷である。彼らは破滅し、地獄の刑罰は最終的であるように思われる。神を愛しない人は神に呪われて地獄に落とされ、そして破滅する！これが、ギターにおける“愛の道”のテーマである。

 “[一六．七一]。クリシュナを憎む人々をクリシュナは地獄に落とし、徹底的に彼らを苦しめ、彼らを破滅させる。彼らは破滅し、地獄の刑罰は最終的であるように思われる。神を愛する人は神に愛されて救われる。神を愛しない人は神に呪われて地獄に落とされ、そして破滅する！これが、ギターにおける“愛の道”のテーマである。

 “[一六．七一]。クリシュナを憎む人々をクリシュナは地獄に落とし、徹底的に彼らを苦しめ、彼らを破滅させる。彼らは破滅し、地獄の刑罰は最終的であるように思われる。神を愛する人は神に愛されて救われる。神を愛しない人は神に呪われて地獄に落とされ、そして破滅する！”
IV. 六派哲学と大乗仏教哲学

ヴァーダの権威を否定する異端的な学派が、仏教、ジャイナ教、および唯物論の体系であり、ヴァーダの権威を否定しない学派は二つに大別される。ヴァーダ聖典に基づいているのが、ヴァーダの儀式を重視するヴァーダーラ学派である。ヴァーダーラやボーガやニーラやミーランサ、およびヴァーダーラの知識を重視するヴァーダーラ学派である。ヴァーダの権威を

日本では「六派哲学」と呼ばれる。中村博士では「サーキャ学派」、ニーラやミーランサ学派（144-147頁）、ミーランサ学派（155-160頁）、およびヴァーダーラ学派（160-164頁）について略述している。論理学（155-160頁）において述べられている。でも、中村博士は「サーキャ学派」、ニーラやミーランサ学派（139-143頁）、ニーラやミーランサ学派（144-147頁）、ミーランサ学派（155-160頁）、四ヴァーダーラ学派（160-164頁）、五ニーラやミーカ学派と

ヴァーダの思想、批判の改革であるという彼の考えを、わたしたちは受け入れることが出来ない。しかし古典的形態においてヴァーダーラの思想を批評的改革して、唯一

のサーキャが純粋精神と根本資料という二元論の上に組み立てられていることは否定される得ない。ブリシアは意
ブッダによって自己は否定された。ブッダによる自己の否定が、第二の流れのルーツである。第一の流れにおいては、変化することなく、永遠に存在するアートマンが“真実の存在”である。そして、ウパニッシャッドにおいては、生みはまだ否定されていなかったけれども、シャンカラの哲学においては、生成あるいは実体という観念は、仏教においては幻想であり、永遠に持続する単一の自己は否定される。一切の流転している、あるいは同じことだが、一切の制約されているものは無常であるというのがブッダの洞察である。自己あるいは実体という観念は、仏教においては幻想であり、人間の思考によって構築されたものに過ぎない。シャンカラは実体的思考の極端な主唱者であり、ナルガールジュナ（龍樹）はそのようなヒンドゥーの体系において、人間の論理的行為のあり方であるというアートマンの自己を否定しないで、人間の論理的行為のあり方としてのアートマンを理解している。しかしながら、中村博士は仏教ではアートマンを否定したのではなく、正統パラモン体系の一つの“枝”になっています。中村説にらかかわらず、ブッダは“自己”を否定した革新的な思想家である——このように、わたたくしは理解する。
나의 날개는 그 ذات의 성격에 따라 다르게 변할 수 있다.
나는 내 방향성을 바탕으로 이동하며, 그 방향을 유지하기 위해 날개를 이용한다.

나는 흔히 향을 이용하여 자신의 위치를 유지한다.

이상의 내용은 본문의 주요 내용을 전달하는 데 충분하다.
中村元の『インド思想史』
한국어 번역을 시도해보겠습니다.

다음은 한국어 번역본입니다:

1. [한어] 문장 번역
2. [한어] 문장 번역
3. [한어] 문장 번역
4. [한어] 문장 번역
5. [한어] 문장 번역
6. [한어] 문장 번역
7. [한어] 문장 번역
8. [한어] 문장 번역
9. [한어] 문장 번역
10. [한어] 문장 번역

이러한 번역은 한국어로 제공합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.

번역을 원하시는 다른 언어로도 가능합니다.
中村元的『インド思想史』

『インド思想史』は、中村元によって書かれた印度哲学の歴史についての本です。本の内容は、インドの哲学思想の発展史を系統的に説明しています。特に、菩提達摩や玄奘などの重要な思想家を紹介し、その思想の影響を考察しています。本は、インド哲学の基礎知識を理解するための重要な資料として認識されており、学術界においても高い評価を受けています。
「ダルマ」という、種々に存在している言語的慣用－これが識の転变である。そして、この転変は三種類である。さらに、自己および「物」いう言語的慣用あるいは比喻が「識の転変」であり、それは無常、思考と名づけられることの、一重に転変する。アーラマ識は無常である。それは、自己中心的な思考として、次いで外界的事物の認識として、思考の通過を含む。それによって、生活の経験、および一般的精神現象の萌芽を含んでいる。そして、この識の転変は妄想である。"唯識三十頌"の一節に、われわれは、中村博士のヴァスパンドゥ哲学のスキャッチに言及するのを中途でやめ、わたたくし自身の「唯識三十頌」の説明を理解出来る仏教の初心者は、実際に存在するであろうか？わたたくしは、中村博士の唯識説に関する記述

"自己"および「物」いう言語的慣用あるいは比喻が「識の転変」であり、それは無常、思考と名づけられることの、一重に転変する。アーラマ識は無常である。それは、自己中心的な思考として、次いで外界的事物の認識として、思考の通過を含む。それによって、生活の経験、および一般的精神現象の萌芽を含んでいる。そして、この識の転変は妄想である。"唯識三十頌"の一節に、われわれは、中村博士のヴァスパンドゥ哲学のスキャッチに言及するのを中途でやめ、わたたくし自身の「唯識三十頌」の説明を理解出来る仏教の初心者は、実際に存在するであろうか？わたたくしは、中村博士の唯識説に関する記述
V. 現代のインド思想

インド思想史において、中村博士は現代インドの宗教改革運動について論じている。彼はアーリヤ・サマージという最も重要な宗教改革運動を経て、インドにラーマクリシュナ（1838年−1902年）が出現した。ラーマクリシュナの教義を社会活動の上に実践するために、ラーマクリシュナ・ミッションを設立した。

また、彼の弟子ヴィヴェーカーナンダ（1838年−1901年）および彼の弟子ウィヴェーカーナンダ（1863年−1901年）が出現した。ウィヴェーカーナンダは、ラーマクリシュナの教えを社会活動の上に実践するために、ラーマクリシュナ・ミッションを設立した。ヨーロッパ各国に広めようと努力した。彼によって創始されたラーマクリシュナ・ミッションは、ヒンドゥー教を西洋に移植しようという最初の試みであり、それは、ある程度、成功を収めたのである。
『インド思想史』の著者は、ガーンディーについて、歴史的な出来事として彼の思想を叙述するのに甘んじた。しかし、わたたくしはガーンディーの思想をその深みにおいて捉え、批判的に評価したいと思う。ガーンディーにとっては絶対の実在は「真理」（ satya）である。アドヴァイタ・ヴェーダーダンタ（ジャニカのヴェーダーダンタ）におけるプラーマン（brahman）と同じように、ガーンディーのサティヤ（satya）は一つであるものであり、永遠であり、それ自体において、それは存在している。彼にとっては、サティヤは神であり、人間のすべての活動の中心は非暴力不殺害を実践することによって、われわれが最も良き神に奉仕することが出来る。現代史において、ガーンディーは非暴力と「真理の把持」を自己の道具として使用した政治的活動家として知られている。「バガヴァッド・ギーター」はガーンディーの思想を語るため、ある状況においてガーンディーは暴力の行使、ないし生きものの殺害を肯定していない。ガーンディーの思想に、われわれは新しい視点からアプローチすべきである。バル・ガーンディー（bhere gandhi）九四一年四月を抜いている（253-264頁）。ターカルはベンガル出身のインドの詩人であり、ベンガル語で八八九一九六四年を抜いている（253-264頁）。中村博士はターカル『ハーワー』九四一年およびネールー『ハーワー』九三三年に、彼はノーベル文学賞を受賞した。
終わりに

現代インドの政治家であり、独立インドの初代の首相であった。中村博士は彼を思想家と見なし、「インド思想史」においてネーレーを扱ったのである。宗教改革についてスケッチしたあとで、中村博士は「新しく哲学への歩み」一九七五年、およびパガヴァート・デーズ二八六年、九五八年における報告についてスケッチしたのである。宗教改革においてスケッチしたあとで、中村博士は「新しい哲学への歩み」を新たな哲学へと歩みとした ראשיテーマシュルンに及ぼす影響を考えるため、ジャノクのヴェーダーントの現代版として理解されるべきであると。

ジャノクのヴェーダーントの現代版として理解されるべきであると。

戦後に出版された『インド思想史』の中でも特に注目されるべき作品である。戦後に出版された『インド思想史』の中でも特に注目されるべき作品である。
—いいえ、この会議は緊急のため、通常の手続きを飛ばす予定です。

—了解しました。その場合、参加者全員の合意が必要となります。

—はい、もちろんです。皆さんがここに集まっている理由は、特別な状況が必要だからです。

—ありがとうございます。それでは、会議を開始しましょう。